大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

近代の性的主体の構造：ルソーの『告白』を手がかりに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅井, 美智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004512

近代の性的主体の構造

― ルソーの『告白』を手がかりに―

浅　井　美智子

1．はじめに

ひとはとりあえず所与の身体に性的類型化がなされる。生まれ落ちたそのときから、いや胎児であるときから性的存在として認識されるものとなっている。つまり、子どもではなく娘あるいは息子の誕生と意識されるのである。ところが、娘か息子か当の本人は知らない。気づいてみれば性的にどちらかに確定されているのだ。その後の教育は、生殖器官の相違によって娘と息子のそれぞれにあたかも自然であるかのように分かたれていく。これはかなり理不尽な生（性）の到来といわざるをえない。しかも、解剖学的にいったん確定された性は、否応なくそのひとの生（性）をルーティン化さえする。つまり、性（セックス）によって、ひとはその後のジェンダーを強制されていくということである。さらに、日常的世界において、セックスとジェンダーは、分かちがたく「自然」と認識されており、これらのズレは異常とされてしまう。

だが、セックスとジェンダーが同一でないこと、それはあまりに「自然」という他はない。生物学的意味での性がそれほど確定的なことでないことはすでに自明である。―解剖学的性と性自認が一致しないことは、生物的存在としては当然出現する。今日では「性同一性障害」という病として類型化されているし、また、解剖学的性、すなわち生殖器すら、明確にオス／メスに二分されない身体も存在する。「アンドロジーナス；両性具有」など―

フェミニズム思想が多くを語ってきたように、ジェンダーは強制的制度として、身体を拘束していく。ジェンダーがセックスと何の疑いもなく接続しているとナイーブに信じることは今や不可能であるとしても、セックスと連続する性的身体あるいは性的主体への信仰は根強い。とりわけ、セクシュアリティ、性行為、生殖、そしてその後の人生、ひとはその死に至るまで、解剖学的性が変更不能の決定事項として規定されていく。この規定こそが、近代社会の権力機構―強制的異性愛、男根的権力を貫徹する制度―の本質（nature）

である。しかし、性的アイデンティティを構成する身体ならびに主体は、近代において、なぜ、どのように自然化されてきたのか。これが本稿において検討しようとする問題である。

この問題を検討するに当たり、近代的主体を自然化したルソーの『告白』に依拠し、また、フーコーの観点を補助線に考えていこうと思う。ルソーの『告白』は、今日のわれわれにとってなじみのある「個人」という観点を明示化した。それは、われわれの意識を悩ます性的身体／性的主体の根拠であると考えられるからである。

2．可視的身体／秘匿される身体

(1) 「個人」の依拠する「身体」

西欧の近代を生きてきた人々は「個人」という観点に疑義を差し挟むことがない。「われわれは個人である－そうあるべきだ－という通念に挑戦することほどわれわれの感覚に反するように思われることはない」(1) とフランシス・バーカーはいう。私はこの感覚に納得とともに違和感を覚える。確かに私は個人である。しかし、同時にこの個人という感覚に「私」として不安を覚えるのである。「個人」とは何かを考えるとき、それは「私」ととりあえず意識する。だが、「個人」と「私」の間にはズレがある。この違和感はどこから来るのだろうか。

「個人」ということばの概念は「人間」のそれと似ている。「私」は「個人」であり、「人間」であると定義されている。だが、「私」はある意味で「個人」でもなければ「人間」でもない。なぜなら、「私」の生活において「個人」という概念も「人間」という概念も必要がないからである。日常生活とはそういうものではないのか。

「私」と直接に関わるのは、否応なく私の「身体」である。痛いとか、うれしいとかの感情はもとより、あれが欲しい、これが欲しい、こうしたいああしたいと、「私」は思う。しかし、これは身体のプリミティブな感覚ではない。欲望や欲求、痛・快のあり様まで、何かに依拠しているように感じられる。これらは外部からやってくるように思われる。なぜなら、これらの感覚は「状況」においてしかありえないからだろう。とすれば、この「身体」は外部の構造と密接に繋がっているということになる。

たしかに、生物学的機能以外の欲望や欲求は、概ね外部の影響によって構成されているといえる。それは決して自然ではない。身体は、社会的関係性の編み目にその存在を現す。独立した「身体」「身体性」というものはありえず、それはつねに言説の形をとって表層化する。したがって、身体は政治、イデオロギー、文化、科学などあらゆる社会の体制にと

って極めて重要な支配すべき認識対象である。

西欧近代は、その権力を及ぼす対象である身体の合理的配置を目指した。フーコーが解き明かしたように、西欧近代への移行期に出現した大規模な囲い込みを通じて、新しい体制にとって不要な身体をもった存在ー病人、犯罪者、狂人、孤児や定住しない人々などなどーは、新たな囲い込みのための施設へと監禁されることになる。新体制にとって有用とみなされる人々は、体制を維持する模範的近代人となるよう設計された。模範的近代人とは、「労働する身体」「健康な身体」、また、そのような身体の再生産が可能な「生殖的身体」の謂であり、このような身体的存在が「個人」と呼ばれることになる。それゆえ、「個人」とは近代の支配体制が名付けた有用な身体をもった存在を支配するための言語であるという意味以上のものではない。だからこそ、「個人」になりきれない身体をもった「私」は、「個人」に違和感をいだいてしまうのではないか。

(2) 告白する主体

では、近代社会の体制は、どのように「個人」を支配するのか。フーコーは近代社会の支配のテクノロジーを４つに類型化している。(1)生産のテクノロジー、(2)記号体系のテクノロジー、(3)権力のテクノロジー、(4)自己のテクノロジー、である[(2)]。これらの４つの型のテクノロジーは、個別に機能することはないが、とりわけフーコーが注目するのは、(3)と(4)のテクノロジーである。権力（支配）のテクノロジーは、服従する個人と密接に関わるが、西欧近代のそれは「自己自身によって自己を規律化する主体」とともにある。つまり、服従化する主体を産出する「自己のテクノロジー」の一般化である。この技術は「告白」という形式をとる。

フーコーは、「真実の告白は、権力による個人の形式という社会的手続きの核心に登場してきた」[(3)]という。西欧社会において、「告白」はギリシャ以来の生活術における主要の規則のひとつであったといわれる。「汝自身を知れ」というデルフォイの掟とは、「自分自身に関心をもち、気を配る」ことである。

「自らを語る」告白は、近代において、「肉体と生命を語る言説、すなわち科学の言説に連結させられた」[(4)]。告白という社会的手続きは、科学的言説の規則に則る。科学は告白の内容に意味を見いだす。この相互作用を通じて「近代的主体」が産出されるのである。

とりわけ、「語らせること」の臨床医学的導きは、性現象に意味と規則を与えることになる。そもそも性は語ることの困難な現象である。科学が解き明かそうとする性現象は本質的に潜在性を内在しているとフーコーは指摘する[(5)]。だが、臨床医学は、普遍性、中立を

装う「性の科学」をその基礎に置くため、個人にその性を語らせる根拠を与える。この告白の解読こそが、主体に性的意味と構造を与える。自己の解き明かされる性の意味は、そのようなものとして個々の主体を構成し認識されていく。

性的主体を科学や政治的イデオロギーに左右されることなく分析するためには、次のような３つの中心軸に沿って行われることが重要だとフーコーはいう。つまり、「〈性〉と関連する知の形成」「〈性〉の実際面を規制する権力体系」「個々人が自分のこの〈性〉の主体として認識することができ、そうしなければならない場合に用いられる形式」(6) である。言説と関わる実践（告白）は、近代の個人が性的主体として自分自身をいかに経験し、どのような認識に至るのかを理解するために分析されることになる。

３．ルソー、「告白」する主体

(1) なぜ、ルソーは告白するのか

ひとは、「自分の犯した犯罪を告白する。宗教上の罪を告白する。自分の考えと欲望を告白する。自分の過去と自分の夢を告白する。自分の幼児期を告白する。自分の病いと悲惨を告白する。」(7) という、フーコーのこの告白内容の列挙は、ルソーの『告白』の中ですべてまさに告白されている。このような、語ることがもっとも困難と思われることを、ルソーは自分自身に向かってし、それを書物にすらした。同時代の人々に「ありのまま」のジャン=ジャックを知ってもらうために。ルソーは『告白』のはじめに、次のように宣言する。

わたしはかつて例のなかった、そして今後も模倣するものはないと思う、仕事をくわだてる。自分とおなじ人間仲間に、ひとりの人間をその自然のままの真実において見せてやりたい。そしてその人間というのは、わたしである。・・・これがわたしのしたこと、わたしの考えたこと、わたしのありのままの姿です。(8)

ルソーにとって、「ありのまま」は「自然 nature」と同義であり、それはまた、「無罪」とも同じである。『告白』の目的は、まず、自己の無垢を語り、同時代の人々から有罪宣告されたルソーを、ジャン=ジャックによって転覆し、「ルソーの無罪」を証明することにあった。人々が出会っているルソーは偽りであり、本当のルソーとはジャン=ジャックなのだと、ルソーは考える。だから本当のルソーを知らしめるためには「告白」しなくてはならない。それは、告白が「語る主体と語られる文の主語が合致する言説の儀式」であり、「内在的な変化が生じるような儀式である。口に出していってしまうことが、その人間を無実にし、その罪を贖い、彼を純化し、その過ちの重荷をおろし、解放し、救済を約束する」(9) からである。

さらに、ルソーは、告白することによって、敵対する社会秩序（アンシャン・レジーム）に対し、自身が提示した個人をその基礎に置く社会秩序（『社会契約論』）に適合的な「主体 sujet」を図らずも提示することになる。それは、近代人の〔服従＝主体ー化〕[10] に他ならなかった。ルソーは告白を書くことによって、自己を認識し検討する主体を構成するテクノロジーを示したということができる。

(2) 自己を規律化する主体

ルソーは『告白』において、自身の転機を「自己革命　révolution personnelle」と表現する。まず、1750 年、『学問芸術論』がディジョンのアカデミーの懸賞論文に当選したその年、第一の自己革命が訪れる。ジュネーヴ生まれのルソーにとって、当時のパリはヨーロッパ一の社交をリードする都会であり、彼はその瀟洒な文化になじめない異邦人であった。『学芸論』はこのようなパリの社交的文化への批判であったが、その当選によって、時の人となったルソーはその批判した文化に浴することになる。この矛盾を克服しようと第一の自己革命が企てられた。

それまでわたしはただ善良であった。これ以降わたしは有徳となる。わたしは人間がすっかり変わった。友人知己はわたしを見まちがえた。おとなしいというより恥ずかしがり屋の、人前にでることも、しゃべることもしないようなあの臆病な人間ではもはやない。ちょっとした冷やかしにもどぎまぎし、婦人の視線にあうとまっ赤になる人間ではなくなった。誇りたかく大胆不敵、わたしはどこでも自身をたてとおした。[11]

自信を取り戻したルソーの背後には、幼いころに父や祖国やプルタルコスの英雄伝によって植え付けられた「父なるもの」への傾斜を示すヒロイズムがあった。
「父＝法」「祖国＝共和国」「プルタルコス＝徳」、これらはたしかに『社会契約論』『エミール』のキーワードでもある。[12]

しかし、第一の自己革命の行き過ぎによって、ルソーは振り子のように逆に大きく振れることになる。第二の自己革命の到来である。第一の革命によってルソーは市民的な独立のうちに有徳たらんとしていたのだが、少しも楽しめない自分を感ずる。

つまるところ、もっとも渇望していた幸福のさなかにいながら、少しも純粋な楽しみを味わうことができない、そこで、青春の清澄の日々に思いを馳せ、ときには溜め息まじりにこう叫んだものだ。「ああ、ここもレ・シャルメットではない。[13]

孤独の中で、ルソーは、ヴァランス夫人と過ごしたレ・シャルメットでの生活を懐かしみ、また、恋へのあこがれを抱きつつ、小説『新エロイーズ』を書き始めた。ルソーはそ

のさなかに現実でもドゥドト夫人との恋愛に傾いていく。これは、「母なるもの」への傾斜と呼ぶことが可能だろう。つまり、「母＝ヴァランス夫人」「家族＝レ・シャルメットでの家庭的生活」「恋愛＝ドゥドト夫人への恋」がキーワードである。

さて、この二つの自己革命は「父なるもの」へまた、「母なるもの」へと弁証法的に展開される軌跡とみることができるが、ここでの問題関心からいえば、ルソーはこの展開を通して近代人としての奇妙な主体を誕生させるテクノロジーを示したことである。つまり告白に書く主体は、自己自身を客体とするという行為を必然とする。この主体の分割こそが近代的主体の大きな特徴であるということだ。自己を不断に検証することを強制される主体、これこそが、自らを服従化させる主体である。『社会契約論』のなかで展開された「一般意思 volonté générale」論は、まさに、身体に従属的な「個別意思 volonté particulière」を一般意思に服従させるべく統御を旨とする「近代的主体」論と見ることが可能だろう。

1762年、ルソーは、『社会契約論』『エミール』の筆禍事件によりパリを追放される。この追放を期に、彼は現実社会との交渉を断ち、孤独のうちに自己の無罪証明の執筆に没頭する。ルソーはこの時期を「自己革命」と名づけていないが、この生活上の変化を一種の「自己革命」と見ることは可能である。これを第三の自己革命と捉えれば、死に至る晩年を記した『孤独な散歩者の夢想』は、ルソーが示唆した近代人の孤立化した「主体」のあり様と見て取れる。

4．身体を疎外する主体

(1) 「直接性」への信仰

ともあれ、先を急ぐまい。ルソーが自己に訪れた3つの自己革命を通して提示したことは、近代人のある意味で不幸な「主体」の獲得の軌跡であるということができる。「自由」で「有徳」な主体は獲得されねばならない。それは、人民の幸福を個々の人民が構築する新しい社会の根幹であるのだから。だが、倫理的保障を個人に帰さねばならないこの社会秩序のなかで、この主体はあまりに孤独である。というのも、身体という唯一の根拠をもっているはずの「私」はその固有のあり様にも、他者へと開かれる「一般意思」の検証を必要とするからである。だが、一般意思へと架橋される個別の欲望は、その残余を個々の身体に留めずにはおかないだろう。

したがって、この「個別の」欲望が「一般意思」の検証に合格するには、「一般意思」と固有の身体に由来する欲望を根拠とする「個別意思」が、直接に出会うことが必要である。

『社会契約論』のルソーが「代理・代表」を嫌悪したのは、まさに、一般意思と個別意思は本質的に合致しないからであり、それが乖離すればするほど悪が介入するからである。ルソーがもっとも「悪の起源」とみなすのは、矛盾しているが、己の生業とする著述の根幹である「言語」である。

ルソーは、言語の獲得を人間の善き進歩とはみなしていなかった。彼は、その最初の著作（『学問芸術論』）において、学問、芸術、文学を人間の堕落であると批判した。この批判は　究極的に言語に対する否定である。しかも、とりわけ否定されるのは文字言語である。言語は人間にとって動物との境界を明示するもっとも大きな差異である。ルソーが言語を否定する根拠は、文字言語が直接性を奪うからである。

人間は、「本質的意味」の「意味するもの」への転移によってことばを獲得したとルソーはいう。ことばは「意味するもの」を指す音声記号でもあった。記号はそもそも事物それ自体（本質的意味）ではない。それはあくまで「本質的意味」の代替である。眼前において話される言語（音声言語・ことば・parole）は経験のうちにあるかぎり、それは代替であっても直接的であって、「本質的意味」の損傷は少ない。ところが、音声言語が文字言語（書かれたことば・écriture）へと移行するとき、それは「意味するもの」と同時に「意味されるもの」を獲得し、言語はその匿名的記号性を完成する。

記号化された言語は、事物と人間を、人間と人間を媒介する。しかも、それは、その匿名的記号性ゆえに「本質的意味」を奪い、「不在」のなかにひとを置くのである。これは本質に対する不足であり、ひとはその何がしかを置き去りにして人間として言語構造に身をゆだねる。しかし、問題は、言語記号がそれ自体何ものでもないにもかかわらず、あたかもそれ自体であるかのごとく現れることである。それは象徴であり、仮像である。文字は直接性を奪う代わりに事物や生身のひと、あるいはその感情の代理として再び現れるのである。代理は「本質的意味」ではなく、観念」として再所有されることとなる。観念を育てるものは想像力だ。想像力の働き（jeu）は、代理に対して過剰を押し付ける。

ルソーの結論は、「直接性」を奪う働き（jeu）こそが、文化の戯れ（jeu）であり、もっとも本質的悪である。

(2)　代補の脅威

ジャック・デリダによれば、言語活動の「本質的意味」の不足と過剰は、「記号の経済」[14] であり、それは、自然のと社会の境位において、「代補　supplément」ということばによって説明できるという。代補とは、代理と補足を意味することばである。それは、

「つねに舌〔言語〕を操ること、つまり、腐敗堕落の可能性としての進歩〔progres〕、悪へ向かっての後退」である。なぜなら、代補行為は、「われわれに不在となることを許し、委任状、代理、他人の手、つまり書くことによって行動することを許す」からである。〈代理するもの〉が力となり世界を動かす代補の構造は、ひとから直接性を奪い、間接的関係を強制する。(14)

しかしながら、ルソーとともに、人間はこの代補の構造を受け入れないわけにはいかない。代補の構造は自然が人間に与えた能力、すなわち「自由の能因 agent libre」、「自己完成能力 la faculté de se perfectionner」に由来するという意味でまた自然であるから、それは甘んじて受け入れなければならない。ただ、ルソーが許しがたく思うことは、「学問と芸術とが完成に近づくにつれ、われわれの魂は腐敗し」(15)、自らが創りあげた檻のなかに自らを入れて、人間を奴隷状態にしてしまうことである。これが『学問芸術論』における批判の本質である。

ところが、ルソーはここで二重の矛盾を侵している。第一に、文字によって文字を否定した。第二に、否定すべき「代理するもの」の力によって否定すべき学問の世界にデヴューしたのであった。ルソーは自らの内に堕落の痕跡を留めてしまった。彼は、最初の論文である『学問芸術論』を著したことを次のように述懐する。

この瞬間からわたしは破滅してしまったのである。これ以後のわたしの生涯とさまざまな不幸は、すべてこの錯乱の瞬間の必然の結果なのである。(16)

ルソーの言説は、それ自身によってその真理を否定され、ルソー自身がまた、その言説によって否定されてしまう。しかし、ルソーはその言説と自己の本質は無罪であると考えている。したがって、その後の彼の自己革命についてはすでに述べたが、取るべき途はひとつしかない。彼はつねに自分が言わんとすることと自己自身の本質を正しく理解してもらうために、論理的言説の過剰と不足を補うべく、その行動と言説を一致させねばならない。さらに、その行動の記録をも示さなくてはならない。これが「告白」せねばならない隠れた意味である。

書くルソーと生身のジャン=ジャックの合一を望むルソーは、書きつづけねばならない。このようなルソーの重層的言説空間を「意味する構造」と呼んだのはデリダである。また、スタロバンスキーは、ルソーの言説と行動の作り出す構造的な空間を的確に捉えている。「作家になる以前にルソーはことばの無力を知った」。ことばは外観の有罪を覆い、覆すことすらできる。しかし、真実の自己を表現するにはことばはもどかしく無力である。ルソーにとって、「本当の価値どおりの自己表現を妨げるこの誤解を彼はどうして克服するのだろうか。・・・

ジャン=ジャックは不在であることと書くことを選ぶ。逆説的ではあるが、、彼はよりよく姿を現すために身を隠し、書かれたことばに自分をゆだねるであろう」。(17)

この「自分は自分である」というトートロジカルな問いを問いつづけなければならい存在、それを「近代人」とよんでも差し支えないだろう。代補の脅威から逃れるために。

5．ルソーにおける性的主体の構成

(1) 「恋愛の情念」という代補

言語は人間にとって「本質」に対する代補的構造をとる。それゆえ、ルソーは言語の起源を人間の堕落の起源として告発した。しかし、言語は「最初の社会制度」である。言語の起源が根源的な代補の開始であるとするなら、社会の起源もまた同様であろう。ルソーは、『言語起源論』において、言語の起源が「情念」に由来するものであることをみた。とりわけ、異性に対して動く情念に注目する。

人間の心を動かすさまざまな情念の中で異性がたがいに必要になる燃えるようなはげしい情念のひとつがある。それは、あらゆる危険をものともせず、あらゆる障害をも払いのけ、熱狂状態になると、本来保存する役目をもっている人類をかえって、破滅させるのに適したように見える恐ろしい情念である。(18)

これは、恋愛の情念である。ルソーは、言語の分節化が社会状態という悪を促すように、恋愛の情念もまた、社会の悪をもたらすと考えている。彼は恋愛の情念に二つの区別を読み取る。ひとつは肉体的なものであり、他は精神的なものである。肉体的欲求は自然の掟に支配された本質そのものであり、純粋に動物的行為を生み出すだけである。問題は精神的欲求である。恋愛における「精神的なものとは、その欲求を決定して、それをもっぱらだたひとつの対象に固定させ、あるいは、少なくともその選ばれた対象のために高度の精力をその欲求に注ぐものである」。そして、それは、「社会の慣用から生まれる人工的な感情であって、・・・比較に基づいている」(19)。ルソーにとって、限定、選択、人工（人為）、比較は、差異の悪を批判する指標である。この差異は自然（本質）からの距離であって、人類の堕落の一形態である。恋愛における精神的欲求は本質からの逸脱である。それは、言語の堕落と同じように、限定、選択、比較などによって、肉体的欲求（本質）を不足するが、それを代理する感情において超過するのである。恋愛の感情は、ルソーの理解では肉体的欲求の「代補」であるということができる。しかも、それは「男性」のそれである。

ルソーは、恋愛の感情が「肉体的欲求という本質からの逸脱」だけでなく、「婦人たちが自分の

支配をうち立て、本来服従すべき性を優勢にするために、（これを）非常に巧妙にまた入念に賞めたたえる」という。彼は欲求充足の衝動を男性の側のものとし、選り好みをせず、それに身をまかせる側に女性を置いているのである。彼が認める性における本質は、男女の主従関係の構造であるといえる。ところが、欲望をただひとりに限定する恋愛の感情は、男の側に競争ー恋する男の嫉妬、夫の復讐による決闘や殺人ーを生ずる。これは主従の転倒である。この競争は、男性にとって恋愛の本質である肉体的欲求を不足させる。したがって、それをうめるために精神的欲求充足を当てがう。つまり、これは代理である。しかもこれは危険な代理である。ルソーは、この危険な精神的代理について次のように述べている。

わたしがイタリアから帰ってきたとき、まったく行く前と同じで帰ったのではないが、しかし、あの年ごろの人間なら、そういう状態ではもどらなかったはずだ。つまり、わたしは純潔は失ったが、童貞は失わずにもって帰った。・・・わたしは、わたしのような気性の青年たちに、健康や元気や時には生命さえ犠牲にして種々の放蕩をまぬがれさせるところの、あの自然をあざむく危険な手段（dangeureux supplément qui trompe la nature）を知った。羞恥心と内気から便宜と考えられるこの悪習は、なおまた、熾烈な想像力をもつものにはたいへん魅力がある。つまり、異性を自分の意のままにあつかうことができ、誘惑を感じる美しい人を、そのひとの同意をえるまでもなく自分の快楽に都合よく利用できるからだ。こういう危険な魅力のとりことなったわたしは、自然が与えてくれた、そしてその発育を待っていた立派な体質をむざむざ損なうようにせいだしたのである。(20)

恋愛の代補、すなわちマスターベーションは命をも犠牲にし自然を欺く、とルソーは認識する。たしかに、18 世紀当時、すでにマスターベーションが健康に悪影響を与えるという医学的言説が流布されだす。とはいえ、ルソーがこの代補を悪と見なすのは、性行為を身体的行為とみなし、マスターベーションが性行為の対象を想像に置くからである。つまり、ここには直接性が欠如することこそ悪であると考えるルソーがいる。マスターベーションでなく対象のある性行為、これこそ、性行為の本質であるとするこの思考は、しかし、対象である女性の存在を物象化している。ルソーはテレーズ・ル・ヴァスールという性の対象者をもっているにもかかわらず、ドゥドト夫人に熱烈な恋愛感情をもつに至る。その恋をルソーは「わたしの生涯ではじめての、たったひとつの恋」(21) と告白する。テレーズはいったい誰なのだろう。彼女はルソーの肉体の直接性を充足する対象でしかないのである。

ルソーはテレーズに恋はしなったが、生涯にわたって性的関係をもった。人生の終わりにはようやく「結婚」という形式に収めた。恋愛という感情の重視が性的身体を疎外した

のか、性的身体が感情を疎外したのか。ルソーがテレーズの感情よりも自己のそれを優先したことだけは間違いない。ルソーは言う。

わたしの欲求のうち、第一のもの、最強のもの、もっとも根強いもの、それはそっくりわたしの心情のうちにある。つまり、心の底からのあたたかい交際、可能なかぎりあたたかい交際への欲求である。・・・肉体がいくらかたくむすびあわされてもそれだけでは満たされない、というほど異常な欲求だ。同じ肉体にふたつの魂がやどるというのが理想で、さもないとわたしはいつも空虚を感じる。(22)

「同じ肉体にふたつの魂がやどる」、つまり、ルソーは相手の主体そのものとの合一化を望んでいるのである。ここに身体と主体のあからさまな乖離と主体の優位が表明されている。しかし、重視する魂はルソーにとって己の魂だけなのである。テレーズの魂はつねに無視されつづけた。

(2) 生殖を忌避する主体

ルソーは、性行為の相手であったテレーズとの間にできた5人の子どもをすべて孤児院に送り込んだ。このことにルソーは自己弁護をしてはいけないと言いつつ、そのあとで、かなりの紙数を使って自己正当化を行っている。礼儀正しく、正直でまっとうな職業についている人々が集まる食卓では、「孤児院にいちばんたくさんの子供を送り込んだものが、いつもいちばん賞賛されていた。・・・これがこの国の習慣なのだから、ここに住む以上はそれに従っていいはずだ」(23) と、言い訳し、何のためらいもなく子どもを孤児院に捨てた。たしかに、当時のパリでは、上流階級において子育てが両親の役割ではなかった。また、生まれた子どもを里子に出し、別の里子を受け入れて授乳し利ざやを稼ぐということも行われてはいた。しかし、孤児院に捨てられる子どもは、不義の子ども、親の貧困などが主な理由であった。ルソーの場合は、育てようと思えばできないことはなかったように思う。テレーズは子どもを孤児院に捨てることをかなり嫌がったが、ルソーは不仲の母親とそのときは共闘してテレーズを沈黙させたのである。

しかし、ルソーの言い訳は続く。テレーズの家族（とくに母親と兄）を悪し様にいい、それを理由に子どもを捨てるのである。

こんな育ちの悪い家族に子供らをまかせて、彼らよりもっと育ちが悪くなったら、と思ってぞっとした。孤児院の教育のほうが危険がずっと少なかったのだ。(24)

「孤児院の方が危険が少ない」という発想は言い訳でしかない。当時、乳児が孤児院で生き残れる確率は、天文学的に低いのである。仮に生き延びたとしても、孤児院から出された孤児の行く末は悲惨なものであったことは想像に難くない。

しかし、子どもを養わなければならないというくびきから解放されたルソーにとって、子どもの行く末などは眼中にない。この言い訳のあとにすぐ、ルソーは第一の自己革命の宣言をするのである。「それまでは、わたしはただ善良であった。これ以後、わたしは有徳となる」[25]。ルソーにとっての徳というものが、いかに普遍的相貌を呈していようとも、それがニュートラルを装った男性のものであったかがわかる。

ルソーがどれほど名高い教育書『エミール』を著したとしても、恋する女性の魂への気遣いはあったとしても、性行為の直接的対象である女性や我が子という直接的存在を簡単に捨て去ることができるその魂のあり様に異常を感じてしまうのはわたしだけなのだろうか。

6．結　語

ルソーは、出生とともに母を失った。父は彼に読書を通して世の中を教えた。しかし、父の存在はルソーに「父になること」を教えはしなかった。ダナ・ハラウェイは、「知の対象とされる身体は、物質ー記号生成の結節点である」[26] という。そして、「科学の客観性（対象を特定の位置に定め、対象に照準を合わせる作業）は、・・・何かを相互に、そして大抵は相等しからざるかたちで形づくったり、リスクをひきうけたりする過程にかかわる存在である」と。

ルソーの告白は、たしかに率直であるという様相を呈してはいる。だが、その言説は男女という社会的性の非対称性を顕わにし、性的リスクを女性の側におくことの正当化のそれであると言いうるのではないか。性に関するディスクールと、生殖におけるそれとを比較するまでもなく、その質と量は、今日の男女の性的主体の構造に関わっている。言説の脅威は、まさに構築されるその言説に身体が服従することにあるのだろう。ルソーは、ジャン=ジャックの身体（ヘテロセクシュアリティの男性）が紡ぎだすモノを言語化しえた。しかし、テレーズは言語化する手段さえなかった。「人は女に生まれない。女になるのだ」というボーヴォワールのことばの意味は重い。

【引用・参考文献】

(1) バーカー・F『振動する身体』末廣幹訳　ありな書房　1997　p.9

(2) フーコー・M『自己のテクノロジー』田村俶・雲和子訳　岩波書店　1990 pp.19-20

(3) 同上書 p.76

(4) 同上書 p.84

(5) 同上書 p.86

(6) フーコー・M『性の歴史Ⅱ　快楽の活用』田村俶訳　新潮社　1986 p.11

(7) フーコー・M『性の歴史Ⅰ　知への意志』渡辺守章訳　新潮社　1986 p.77

(8) ルソー・J＝J『告白』上 桑原武夫訳　岩波文庫　1965 p.10

(9) フーコー・M『性の歴史Ⅰ　知への意志』渡辺守章訳　新潮社　1986 pp.80-1

(10) 同上書 p.79

(11) ルソー・J＝J『告白』中 桑原武夫訳　岩波文庫　1965 pp.215-6

(12) 浅井美智子「ジェンダー視角からのルソー思想の検討」『理想』理想社　1997 参照

(13) ルソー・J＝J『告白』中 桑原武夫訳　岩波文庫　1965 p.229

(14) デリダ・J『グラマトロジーについて　下』足立和浩訳　現代思潮社　1983 p.3

(15) ルソー・J＝J『学問芸術論』前川貞次郎訳　岩波文庫　1968 p.9

(16) ルソー・J＝J『告白』中 桑原武夫訳　岩波文庫　1965 p.120

(17) スタロバンスキー・J『透明と障害』松本勤訳　思索社　1973 p.235

(18) ルソー・J＝J『人間不平等起源論』本田喜代治訳　岩波文庫　1953 p.76

(19) 同上書　p.77

(20) ルソー・J＝J『告白』上 桑原武夫訳　岩波文庫　1965 p.155

(21) 同上書　中　p.248

(22) 同上書　中　p.212

(23) 同上書　中　p.109

(24) 同上書　中　p.214

(25) 同上書　中　p.215

(26) ハラウェイ・D『猿と女とサイボーグ』高橋さきの訳　青土社　2000 p.405